

巻 頭 言

化学科主任 古川行夫

化学科卒業生の皆様におかれましては益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。化学科前主任の石原浩二先生のあとをうけて、昨年9月から主任に就任しました。1997年9月に化学科に着任してからまだ日が浅いのですが、年齢順ということで主任の大任を仰せつかりました。世の中で国公立大学の改革が急速に進んでいる状況下、早稲田大学においても組織改革、入試改革、教育改革など大変な時期にさしかかっており、微力ながら気を引き締めて取り組んでおります。

早稲田の理工では、今年の4月から生命理工学専攻が立ち上がり、化学科からは松本和子先生と中田雅久先生が参加されています。また、化学専攻から7名の学生が生命理工学専攻へ移籍しました。皆様ご存じのように早稲田の理工には、これまで生命に関する学科・専攻がなかったのですが、今後、生命分野に力を入れてゆこうとしております。

学部的一般入学試験ですが、2000年度の応募者数は過去最低でしたが、一転して、2001年度の入試では1,062名と最高を記録しました。応募者数が急増した理由を知りたいと思い、新入生にアンケートをとりましたが、はっきりとした理由はわかりませんでした。今年度の化学科の学部在学者数は、1年生77名、2年生77名、3年生52名、4年生64名です。大学院在学者数は、修士2年生は32名、修士1年生は30名です。学部・大学院修士課程の学生数は以前と比べて増加しており、化学科の学則定員が50名に増加された影響がみられます。大学院博士課程在学者は全員で3名と少なく、寂しいかぎりですが、

現在の修士2年生の在学者数が多いことを反映してか、来年度は博士課程への進学者が多くなる見込みです。今後も増えてゆくと予測しております。日本の企業でも博士号取得者を多く受け入れる素地ができることを願っております。

理工学部では、今年度から「創成入試」という新しい入学試験を始めました。1次試験は、高校の調査書の理科・数学・英語の評定平均、志望理由書、理科の先生の推薦書などの書類審査を行い、2次試験では、大久保キャンパスで実験をやってもらい、その結果をレポートにまとめて発表してもらい、質疑・応答をおこない、合否を判定しました。今年度は3名が合格しました。創成入試が周知されていなかったせいか志望者が7名と少なかったのが残念でした。卒業生の皆様におかれましても、創成入試の話題を広めていただき、応募者が増えるようにご協力いただけますと幸いです。

昨今、「化学」というと何となく良いイメージがないように思われますが、昨年は筑波大学の白川英樹先生が、今年名古屋大学の野依良治先生がノーベル化学賞を受賞され、世の中で化学のイメージが上がっているのを嬉しく思っております。また、ケミストリーという名前の歌手グループも登場して、今後は、化学ではなく、ケミストリーといったほうが若い世代に受けがよいかなどと思っております。卒業生の皆様におかれましても、今後とも、忌憚のないご意見を化学科におよせいただき、また、化学科をご訪問いただき、教員、学生に刺激を与え、化学科の発展にご尽力いただけますようお願い申し上げます。

受 賞

高宮信夫元稲化会会長、 勲三等瑞宝賞受賞

本会の元会長で早稲田大学名誉教授高宮信夫先生が去る11月3日勲三等瑞宝章を受章されました。

先生は第二次大戦後の物資の乏しい時代にいち早くガスグラフグラフィー装置を自作してわが国におけるその啓蒙普及に尽力されました。また、OHPを自作して、映像による化学教育法の発展にも大きな足跡を残しました。化学科の創立に献身され、長く本会の会長を勤められました。本会への貢献を謝し、今回の受賞を心からお慶びいたします。

卒 業 生 便 り

中学現場から理科を思う

第7期 益田 孝彦

伊藤紘一研を卒業してからはや19年。私は理工学部にあっても応援団的に早稲田に思いっきりはまり、1年の春と4年の秋に優勝パレードした当時のことが懐かしく思います。

さて現在の私は、応援団的に「人に対して強い」個性が遺憾なく発揮されているというか、中学で理科を教える傍ら、サイエンスレンジャー「おもしろ博士」という肩書きで日本各地でサイエンスショーを演じるようになっていきます。また、小学校に頼まれ、慶応幼稚舎をはじめ県内の数校で授業も実施しました。

そんな中で感じることは、本当に理科離れは起きているのだろうか？ということです。観客や児童が能動的になっている状況でのショーであり授業ですから、みなさん積極的なのは当

たり前なのかもしれません。そこからの実感は、子供は科学的現象への知的興味は十分に持っているというものです。先日有馬前文部大臣とお話しした際には、「問題があるとすれば、小学校に理科を研究する学校が減って、かなりの現場で教師側が理科を教える自信を失っていること。教師再生のためのT・T授業の展開が小学校理科を劇的に再生できる可能性があるのでは」と提案させていただきました。

では中学理科はおもしろい教科でしょうか？きっと入試問題を解くための授業ならNo。教師の教え方が下手であってもNoだと思います。他教科から見れば理科ほどバラエティに富んだ内容のおもしろそうな教科はないと言われます。生徒は楽しい授業を展開できればYesと答えてくれるに違いないのです。

現任校の三崎中学校は今、理科ブームです。生徒の自由研究作品がどんどん入賞したりして、「理科の研究をしたい」という生徒が沢山出ています。私も時間をかけてまるでゼミのように沢山の個人研究につきあっています。中学には聞き慣れない『自由研究部』が有ることが三崎中らしさというか、私らしさにもなっています。稲化会名簿に、決して多くはありませんが、小中の教員になられた同志のお名前を拝見するようにもなりました。お互い切磋琢磨して、現場の期待を背負って立てる教員としてさらに努力しあいましょう。

「研究は一人ではできない」ということ

第9期 飯野 幸生

『会社での研究生生活もすでに11年になる。その研究生生活を通して、今、感じていることを述べみたい。

私は新田先生の研究室で有機合成化学を学び、修士・博士課程を修了後、1991年に大学を離れて以来、ずっと「味の素」で医薬品の探索研究をしている。あまり知られていないが、「味の素」では病院向けの医薬品を開発しており、私はその中で最も上流にあたる探索研究に携わっている。社内で見出された活性化化合物 (Lead

compounds) を優れた医薬品に仕上げるのが私の仕事で、化合物の活性をより強くしたり、選択性をより高めたり、または毒性を無くしたり、医薬品として最適化 (Lead optimization) するためにどう化合物を変換したよいか、模索している毎日である。

早いもので私の会社での研究生活も11年になり、幸いなことに「これはすごいぞ!」と思われる医薬品候補に巡り会うこともできた。その過程で多くの仲間と議論しあい、協力しあい、助けあった。そして今、私が研究生活を通して強く感じていることは、やはり「研究は一人ではできない」ということである。

医薬品の研究は、私のような合成研究者以外に、化合物の細胞評価などを行うバイオ研究者、化合物の動物での効果を評価する生物研究者など、多くの人たちとの共同作業により成り立っている。バックグラウンドが同じ合成仲間に対しては、内容を充分理解した上で議論をしながら仕事を進めることができるが、バイオや生物など技術分野の異なる研究については、お互いの内容を充分理解することはできない。内容が理解できないと、何か問題が起きたときに相手側の責任と考えがちで、例えば化合物の活性が再現されないということが起きた場合、合成研究者は「細胞評価系がおかしいのでは」と考え、一方でバイオ研究者は「化合物がおかしいのでは」と考えてしまう。このような状態では、化合物の合成も、評価もスムーズに進まなくなってしまう。そこで大切になるのが、自分と異なる技術分野の研究者との、「相互の信頼関係」である。逆説的ではあるが、相手のことがよく判らないからこそ、相手への信頼がより大切になってくるのである。自分は相手のためにベストをつくす、相手も自分のためにベストを尽くしてくれる、そんな信頼関係を築くことができれば、研究を実にスムーズに進めることができるようになる。確かに、信頼関係は容易に築けるものではないが、相手と十分に議論し、自分と相手の役割を尊重しあうことができれば可能である。そして、まず自らが相手の期待に応えるためにベストを尽くす、という姿勢を相手に伝え、そしてこれがしっかり相手に伝われば、

相手も自分のためにベストを尽くしてくれるようになるのである。まず自分が相手を信じること、その一歩が、信頼を築くために大切なのだと思う。

「研究は一人ではできない」ということに関して、もうひとつ大切なのが「自分と異なる考え方を尊重する」ことである。私は現在、ある研究テーマの合成責任者で、合成方針を決定する立場にある。方針を決めるときは、たいてい同じグループの合成研究者と議論して決めるが、責任者である自分が正しい選択をできるとは限らない。もちろん自分が最適と信じる方針を選択するが、一方で自分と正反対の考え方もできるだけ残して、実行するよう心がけている。それは、テーマが行き詰まったときなど、私が選んだ方針以外のところからブレイクスルーが出てくれた、という経験を今までに何度もしているからである。考えてみれば、正解がどこにあるのかわからないのが研究である。そのような不確定なものに対しては、ひとつの考えにとらわれない多様性こそが、ブレイクスルーを生み出す源となるのだと思う。

「研究は一人ではできない」ということを認めることは、他者を信頼し尊重することが大切だと理解することを意味するが、一方で、自らが完璧ではないことを自覚することにもなる。私を含め、研究者というものは正しい選択をしなければと自分を追い込んでしまいがちだが、周りの人が助けてくれると思えば、精神的にとっても楽になれるものだ。おかげでだいぶ私も楽になった。

思えば大学時代の研究を考えてみても、新田先生はもちろんのこと、多くの先輩や同輩、そして後輩と家内 (多田研卒) に助けってもらっていたことが思い出され、今もとても感謝している。

また、会社に入ってから、多くの尊敬できる上司、同僚、そして後輩に支えられてきた。

「研究は一人ではできない」のだから、いろいろな人に手伝ってもらって、これからもできる限りよい研究を続けていきたい。』、と思いたいものだ。

“新しい研究室の立ち上げ 「なわとび分子」等”

第9期 鹿又 宣弘

私が現在の職場である明治大学理工学部工業化学科で研究室を立ち上げてから、早いもので3年弱の月日が経とうとしており、現在では研究室一期生のM2が3名、M1と4年生が6名ずつの計15名体制でグループが動いております。私は学部、大学院、助手時代の11年間を早稲田大学で過ごし、シカゴ大学で博士研究員を2年間努めた後、理化学研究所、科学技術振興事業団と研究職を渡り歩き、1999年4月に明治大学に赴任いたしました。早稲田の助手以来、7年ほど教職から遠ざかっておりましたので、活気あふれる大学のキャンパスに戻ってきた時の感触は大変印象的で、つい昨日の事のように思い出すことが出来ます。明治大学は早稲田大学同様、一教員一研究室制度（講座制に対して学科目制というそうです。）を取っているためすべてを自分一人で行わなければなりません。しかも分析系研究室の跡地を引き継いだため、ほとんど更地に近い状態からの立ち上げとなり、今思うと当初は嵐のような日々の連続であったような気がいたします。（少々大げさかもしれませんが。）着任早々卒研5名が配属されておりましたので、大急ぎで器具や試薬を用意し、ようやく実験をスタートできたのが5月末の事でした。「あれが無い、これが足りない」状態が暫く続いておりましたが、最近ようやく落ち着いてきたと言うのが実感です。

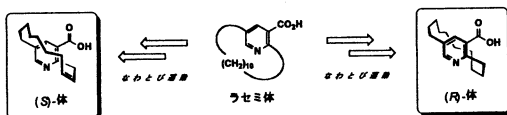
私の専門は有機化学であり、卒業研究・大学院は新田先生に、また助手時代には多田先生にお世話になり、含窒素芳香族化合物の研究に従事いたしました。留学中はやや異なるテーマで研究をいたしましたが、帰国後国内では唯一若手研究者に独自のアイデアで研究する場を与えている理化学研究所の基礎科学特別研究員制度に応募し、現在も行っているシクロファン型人工補酵素分子の合成と機能性に関する研究をスタートさせました。自分のアイデアで研究できる楽しさの一方で、成果が得られなかった場合

のハイリスクも抱えておりましたが、プレッシャーのかかる研究生活をそれなりにエンジョイしていたような気がします。最初の論文が出るまで丸2年かかりましたが、オリジナリティーのある研究成果を注目度の高い論文誌に発表できた時には、独立して研究を行えることの真の喜びを味わうことができました。その後、その発展的研究課題が科学技術振興事業団の「さきがけ研究21」に採択されたことは大なる励みとなり、独り立ちのチャンスをいただけるきっかけとなったのみならず、いろいろな意味で力強いサポートをしていただけたと感謝しております。明治大学へ着任するにあたり、研究室名を機能有機化学研究室としました。これまで作られたことのない有機化合物を合成し、その物質に特有な新しい使い道や役割を探る研究を進めていく上で、最もふさわしい名称と考えたからです。

現在、私の研究室では、主にシクロファン型機能性分子の創製とその反応性に関する研究を行っております。シクロファン分子とは耳慣れない言葉だと思いますが、亀の甲でおなじみの六角形に炭素鎖のロープが巻き付いた面白い形をしている化合物です。小さな分子ですが、なかなか芸達者であり、このロープは六角形を飛び越えてなわとび運動をします。最近、このなわとび運動を立体的にコントロールし、ロープの架かり方を六角形の前方、あるいは後方にだけ揃えた分子を合成することに初めて成功しました（下図参照）。これらの分子は不斉炭素を持っていませんが、お互いが鏡像の関係にある立体異性体であり、面不斉分子と呼ばれています。これらの方法により、キラルなシクロファン分子を立体選択的に供給することが可能となりました。この「なわとび分子」を利用して、望む三次元構造の物質だけを高立体選択的に合成できる不斉触媒の開発や、補酵素の酸化還元機能を模倣した生体モデル分子として応用する研究を行っております。また、これらの研究を足がかりとして、新しい補酵素モデル系の研究、シクロファン分子の新しい合成法の開発、さらには面不斉を持つ実用的機能性触媒の創製へと研究を発展させたいと考えております。幸い学

生も研究のおもしろさと楽しさを感じてくれているようで、卒業生はこれまでのところ転出組も含めて全員が大学院へ進学してくれています。明治大学の意欲あふれる学生諸君とともに築き上げてゆく化学の未来像がどのような形となって現れてくるのか、私自身も大いに楽しみにしている毎日です。

なわとび分子のステレオコントロール



研究室のホームページ：

<http://www.isc.meiji.ac.jp/~kanomata>

“卒業後7年を過ぎて思うこと”

第16期 日吉(旧姓：市来)玲子

今回、高橋先生からこのようなありがたい機会を頂戴したので、私の少し変わった仕事と、学生時代に携ったラマン分光とのかかわりについて、拙文ながら紹介させていただきたいと思う。

私は高橋研での修士課程を修了後、警察庁の科学警察研究所というところに平成6年から勤めている。地下鉄サリン事件や毒入りカレー事件の鑑定などで一躍有名になってしまった研究所である。扱っているものは法律で厳しく規制されているものが多く、一般の方はなかなかお目にかかることの出来ないものが研究所内に点在している、少し変わった研究所である。

私のいる研究室は「爆発研究室」というすごいインパクトをもった名前である。そこでの研究は、爆発現象というまだ解明されていないことの多い、エネルギー物質科学へのアプローチである。警察的な仕事としては、爆弾事件、爆発事故が起こった際に、爆発した物質の特定、原因調査、威力の評価などがメインであるが、研究においては、他の研究機関同様、私のいる研究室でも耐圧ピットで実際に爆発実験を行い、爆発の現象やその効果など、さまざまな計測を行っている。

爆発の際には衝撃波が生じ、ものすごい圧力と光や熱などのエネルギーが放出される。爆薬の威力や爆風の圧力、衝撃波速度などの物理現象に関してはさまざまな研究がなされ多くの知見が得られているが、その原動力、トリガーになっている構造、励起状態での構造など化学的な分野はまだまだ実験的に解明されていない。

ご存知の方も多いかと思うが、リアルタイムでその構造変化を見ることが出来ないか、という観点から、エネルギー物質の分野ではラマン分光が用いられている。一般的な爆発性有機化合物は、衝撃波などで叩かないと爆発しない。そこで、ナノ秒やピコ秒のパルスレーザーを用いて衝撃波を発生させて試料に導入し、ナノ秒・ピコ秒でのラマン分光でその構造変化を捉えようという試みが、つくばなどにあるいくつかの研究所で行われている。私も少し関わらせていただいたが、まだまだ未開拓の分野である(ので、夢もある！)。

動的な、リアルタイムでの評価は、爆発という現象のため危険が伴ううえ、多大なエネルギーが光として放出されるので、ラマンの測定は難しくなる。そこで、「高圧」という条件のみに注目して、ダイアモンドアンビルセル(DAC)という高圧発生装置を使って、静的な圧力がかかった場合の構造変化に関する研究も行われている。DACは、厚さ0.5mm程度の金属薄片にけられた数十～数百 μm の穴に、試料と圧力媒体を入れて一対のダイアモンドで挟み込み、圧力をかけていく装置である。衝撃波などの動的な(断熱圧縮を伴う)圧力と、熱の逃げる時間が十分に取れる静的な圧力とでは、試料の反応も異なってくることは容易に想像されるが、それでもDACでは10万気圧(ダイアモンドの面積によっては～100万気圧)という超高圧を発生させることが可能であるため、そこから得られる情報は重要である。一般的に、爆薬の起爆に用いる電気雷管は、2万気圧程度の衝撃波を発生するといわれている。つまり、DACを使用すれば、熱的な条件はともかくとして、実際に爆発を起こさせる程度の圧力は十分に実現可能になる。そのDACを顕微鏡下で観察しながら、高圧状態でのラマンを測定し、

構造の変化を捉えるのである。

もう一つのアプローチとしては、分解物から反応スキームを推定するという手法がある。私事になるが、昨年の夏から1年間、米国デラウェア大学に留学する機会を得た。お世話になった教授は、ミサイルなどに用いられる推進薬の分野では世界的に有名な Dr.Brill で、試料を 2000°C/min で高速分解させ、FT-IR やラマンによるその生成物プロファイルから分解反応スキームを考察し、その特性を評価するという研究をしている。こちらは、爆発ではなくて熱分解であるので、起こっている反応はかなり異なったものであると思われる。しかし、雰囲気ガスそのものやその圧力、熱分解温度をかなりの範囲でコントロールできるので、熱分解の条件を変えていくことで、試料を衝撃波で叩いた時（高圧・高温条件）の反応の傾向を予測できると考えられる。

化学科高橋研を卒業してから出会った「エネルギー物質」の面白さに魅了されながら、相変わらずラマンと関わることが出来ているのは、本当にラッキーであったと思う。もちろん、高橋研では辛いこともあったが、完全には理解できないながらも「面白い！」と思えるものが見つけられたような気がする。それも、ご指導いただいた高橋先生や、お世話になった偉大な諸先輩方、研究室の仲間たちのおかげである。

出来る、出来ないはともかくとして、研究が面白い、と思う気持ちを大学にいる間に少しでも経験出来る方が大勢出てくれるといいなあと、化学でメシを食いつつ思う私は、少し年をとったという事だろうか……。

研究室便り

石原研究室

56号館409号室に位置する石原研の専門は無機溶液反応であり、現在、反応速度論を用い白金錯体およびボロン酸の反応機構の解明を目的

として研究を行っています。石原研が行っている反応速度論とは、紫外可視分光光度計で反応の吸光度の経時変化を測定し、その吸光度の経時変化から速度定数を求めることがメインとなります。速度定数は、温度、圧力、配位子の濃度等により変化するので、様々な条件で速度定数を求めることにより反応機構の考察を行うことができるわけです。

今年(2001年度)は、修士1年3人、学部生4人、そして石原教授の計8人というメンバー構成になっています。具体的な研究テーマは、修士1年3人が白金(III)二核錯体の軸位置換反応で、白金に架橋している配位子の種類が違う3種類の錯体の研究を3人それぞれが行い、3人が一岩となって、その反応性の違いを比較、検討しているところです。

一方、学部生4人の研究テーマは、ボロン酸、白金(II)単核錯体、メチル白金(IV)錯体、白金(III)二核錯体とバラエティーに富んでいます。ボロン酸は平面三配位のホウ酸の一置換体であり、オキシシンの二座配位子がNとOで配位して四面体型四配位へと構造が変化しますが、どちらの配位が律速か意見の一致を得ていません。石原教授がその論争に終止符を打つため長年取り組んでいる石原研のメインテーマですが、まだまだ時間がかかりそうです。白金(II)単核錯体は、白金(II)二核錯体の異性化反応の反応機構を解明するため、詰めの段階として行っています。メチル白金(IV)錯体はこれまでもかなり研究をしてきましたが、今年は3座配位子が配位したメチル白金(IV)錯体に挑戦中。

今年の石原研は少人数ですが、その分みんな仲が良く非常に明るい研究室ですので、どなたでも気軽に遊びに来てください。

伊藤研究室

伊藤研究室は現在、先生、客員研究員のOさん、M2のNさんと筆者、M1のK君、T君、Y.S君、Y.T君、B4のI君、M君、S君、O君、そして社会人の生活をしつつ卒業研究に取り組んでいるI君の13名で構成されています。行っている研究は、観測対象をLB膜・

金属表面・有機分子の蒸着膜とし、赤外・ラマン・和周波発生分光法(SFG 分光法)および計算を利用して表面や界面に存在する分子の並び方を調べるということをやっています。今年の秋に札幌で行われた学会では2件、発表しました。Y.S君は初の学会発表のためか、緊張しすぎてマイクを入れ忘れるということもありましたが、そんなことを微塵も感じさせない堂々とした発表でした。Oさんはポスター発表で、SFGをやっている他のグループと密なディスカッションを行っていました。そして、そのときに知り合った方が装置の見学に来られるという副産物もありました。

伊藤研のセールスポイントは、研究室内に笑いが絶えず、雰囲気が良いということでしょうか。実験でつまったときや先生に怒られてへこんでいるときにこの明るい雰囲気は救いになります。Y.T君は、B4のよき「お兄さん」役として雰囲気を盛り上げています。その雰囲気を反映してか、先日行われた飲み会では研究室のメンバーのほとんどが集まり、楽しく(激しく?)飲みました。ハメをはずしすぎてreverseする人も出てしまいましたが……。

話はガラリと変わりますが、実は筆者は個人的に今年の3月に助手のAさん、Uさんが巣立っていかれ、指導的な立場の人が減り、研究室は成り立つのだろうかと心配しておりました。ところが、それは杞憂に終わりました。3月から入ってきた人たちは主体的に実験し、勉強しようとする人たちでした。その裏には、これまでの不勉強に対する危機感もあるようですが……。筆者は自分が4年生のときのことを思い出し、ここまでpositiveであったらどうかと考えさせられます。今後もこのような主体的な姿勢を保ちながら、将来研究室を担う存在になることを願って結びにしたいと思います。

高橋研究室

☆概要

分子構造に関する研究を理論的、そして実験的側面から行っている。主に時間分解共鳴ラマン分光法(ナノ・ピコ秒領域で)の測定技術を

使用して、励起分子の構造や反応機構の問題に取り組んでいる。

☆高橋研の現状

装置の故障やトラブルにもめげず、日々研究が続いています。一筋縄ではいかないのが、この研究室の特徴。実験をしない時は時間を持って余している様に見えるけど、実験を始めると徹夜が当たり前です。4時間で終わると見積もっていたのが、実際にはその倍、下手をしたら徹夜になるなどという事もよくあります。しかし、なかなか思い通りにいかないだけに、ちゃんとした自分の望んでるデータがとれた時は、苦労も報われ睡眠の楽しさもわかります。

最低限の事は理論で覚えられますが、装置に触れたりしながら覚えていく事のほうはずっと多いので、他の人の実験を実際に見たり、やる時はやる!という気合を入れないと大変です。時間に関しては比較的自由に見えますが、高橋研が本格的に動き出すのは他の研究室の人が帰ってからなので、他の研究室の人が語る「高橋研究室」の話の信じて入ると痛い目にあいます。

装置面に関しては、今年の夏に新たにNd:YAGレーザーを導入したので、ナノ秒領域における研究の幅が広がりました。

この研究室の最大の特徴は、やはり研究室の一体感だと思います。基本的にほとんどの測定は一人では出来ないのも、他の人の実験を手伝ったり協力する事はよくあります。そういったお互いを協力してサポートしていく事により、一体感が生まれ、また自分の理解も深まります。いつの間にやら、自分のサンプルよりも人のサンプルについて詳しくなっていたり…?

頭と体、両方であつかんでいく研究室なので、図書館でもって勉強するタイプにはむいてないけど、体力に自信があつてなおかつ興味があれば、高橋研究室はおすすめです。努力した分だけ帰ってきます。

余談ですが、お酒にも強い方がいいです。もちろん、強いに越した事はありませんが……。

多田研究室

多田研では多田先生と秋葉先生の2名の先生

中井研究室

にご指導を受けています。多田先生はご存知のとおりとても優しい先生で、生徒の自主性を尊重し、生徒を一人の大人として扱ってくださる先生です。秋葉先生は広島大学理学部を退官なさった後、去年多田研に客員教授としてお招きし、現在共同研究を行なっています。秋葉先生はとても元気な先生で、一人一人に対して熱心に実験の指導をしてくださっています。ちなみに、趣味は俳句を詠むことだそうです（授業でも披露しているとか）。

多田研の研究テーマは以下のようになっています。

1. 葉酸およびメタノプテリンのモデルとなるプテリジン同
2. 族体の合成法の探索。
3. コバルト錯体であるコバロキシムを用いたラジカル反応の研究。
4. ニッケル錯体によるメタン発生機構の解明。
5. 補酵素モデル化合物の反応試薬としての研究。

また多田先生のテーマとは別に秋葉先生の研究テーマとして、超原子価化合物の反応性についての研究を行なっています。

構成員はM2が6名、M1が2名、B4が5名となっております。基本的に、月一回の実験報告に向けて日々実験に取り組んでいます。また新田研と合同で論文紹介行なっています。各人が別々のテーマで研究を進めているため、実験に対するモチベーション、責任感、好奇心などが実験を進めていく上で重要になっていると思います。特にはっきりした拘束時間があるわけではなく、朝から晩までひたすら実験する人、その日の予定が終わりしだい帰る人、実験室が我が家になっている人等々いろんな人がいます。

実験以外にも、花見を行ったり、理工スポーツ大会に出場したり(今年はソフトボールで3位入賞と大健闘でした)、野球大会をしたり実験室の内外に問わず活発に行動しています。ともかく現M2が非常(異常)にエネルギーで、M1、B4を引き連れて楽しいことなら何でもやろうといった感じですが。実験しやすい、勉強しやすい、(遊びやすい)環境で毎日元気に楽しく過ごしています。

一般に「化学の研究室」と聞いたとき、フラスコや試薬、測定器具などの実験道具が散乱し、年中実験をしている様子を想像する方は多いでしょう。しかし我々中井研究室には、そういった実験道具は何もありません。それ以前に実験をしません。しかしそれでも「化学研究」を行っているのです。

中井研究室は、「理論化学」の研究室です。「自然界の現象」を、「理論的に」解明しようとしします。そして理論解明の手段として、我々はコンピューターを用います。我々の手法は、実験と方法は違えど、自然法則を見出そうとする姿勢は実験と同じです。

中井研の一室は30台以上のワークステーションで埋め尽くされています。B.O. 近似に基づかない新たな理論の構築、固体表面の反応の解析、核生成現象の追跡など、我々の興味は多岐に渡ります。これらの興味の対象を解決するため、ワークステーションは日夜動きつづけています。

我々の研究室のボス、中井先生はパワフルな先生。我々を時にはやさしく、時には厳しく見守ってくださっています。そんな中井先生と共に、D1・1名、M2・3名、M1・4名、B4・4名の、12人の学生メンバーが研究に励んでおります。我々の研究室は、いつも和気藹々とした雰囲気です。ほぼ毎日昼ご飯を先生も交えて食べに行ったり、年末に先生宅にお邪魔してメンバー全員で忘年会をしたり、年1回のゼミ合宿に行ったり、月一回お食事会が開催されたりと、自然発生的な行事も多く、先生&メンバー同士の仲が大変いいことも自慢(?)の一つです。

その他中井研の研究についてや、メンバーのお茶目な姿などは、ホームページに掲載しています。ホームページアドレスは、

<http://www.chem.waseda.ac.jp/lab/nakai/index.htm>です。ホームページ、さらには51号館の10階中井研究室へ、ぜひ遊びに来てくださいね!

中田研究室

中田研究室では、生物活性天然物と呼ばれる複雑な化合物の合成を中心に研究を行っています。生物活性天然物は自然界においてカビや植物などにより生産されており、『医薬品』になるような優れた生物活性を持っている有機化合物もあります。現在、主としてTaxol®、FR182877、Ustiloxin A、Pamamycin607、Erinacine E、Phomopsidine等の合成研究を行っていますが、これらの化合物は『世界で初』の全合成を目指すものもあれば、全く新しいルートで効率的に合成を試みるものもあります。それらは単に複雑な構造を持っているだけでなく多くの不斉中心が存在しているため、その不斉合成が問題となってきます。そこで中田研では合成班だけでなく、今年『ノーベル化学賞』でも話題になりましたが、オリジナルな不斉触媒を用いた不斉合成にも力を入れています。中でも金属触媒を用いる方法は、効率の点から理想的なのです。現在進行中なのは不斉触媒の設計と合成、金属触媒を用いた分子内シクロプロパン化反応などがあります。

最後に、毎日朝から晩まで実験漬けのメンバーを紹介。

研究室一若い？先生を筆頭に、

Taxol®班：長老は芸能がお好き 岩○(M2)、裸の大將 ○中(M1)

FR182877班：コーヒー1番、ゲームは2番、3時のおやつはカップ麺 鈴○(M2)、カリスマ(かもしれない)、かっこいい(らしい) ○里(M1)

Ustiloxin A班：3年目も寝太郎 多○(M2)

Pamamycin 607班：キレンジャーよりカレー好き ○松(M2)

Phomopsidine班：ハイ、そこセクハラやめてください ニ○原(M2)、名実どちらかNo1 ○宅(B4)

Erinacine E班：中田研唯一の華、頼れるアネゴ 藤○(M1)

不斉触媒班：人柄、行動、睡眠、すべてが仏様、化学科ダジャレ王 高○(M2) 中田研きっ

てのデストロイヤー、新人王狙ってます 武○(B4)、今夜もお泊り朝帰り 井○(B4)

不斉シクロプロパン化班：ある意味重役、PM出勤 米○(M1)、「スッゲー！」「マジデッ！」澤○(B4)、テレビっ娘。○間(B4)

以上、先生と15名の学生で頑張ってます。来年からは3人のDr進学が決まっており、ますます中田研も発展していくでしょう。

新田研究室

我が新田研究室では、主に芳香族化合物を対象として研究を進めています。新しい芳香族化合物、複素芳香族化合物の新規合成法の開発、静的、動的な構造と電子的及び化学的性質の解明と新しい機能の発現などに着目し研究を展開しています。

研究室の日常生活は朝10時に始まり、夜遅くまで各自の研究実験をひたすら続けます。そのほか有機系の合同ゼミや各自の興味を中心とした文献紹介に関するゼミを行います。続いてメンバー紹介ですが、まずは新田先生。温厚な人柄で大変親しみやすい先生です。池田先生はいつも笑顔で話しかけて下さいます。学生のほうは、現在助手2名、博士課程2名、修士課程3名、学部学生4名で構成されています。嵐を呼ぶ男と噂される助手のHYさんは、頼れるちょっとシャイなヘビースモーカー。助手のSNさんはこの研究室のリーダー的存在。みんなに頼られる化学が大好きな熱い人ですが、いつもダジャレを連発して研究室を寒くしています。スキーの得意なD3のYTさんは、いつも洋楽を聞いています。バイクと香りには人一倍こだわるD1のYMさん。どんな化合物も匂いだけで当ててしまう匂いフェチ丸出しの彼は新田研の誇る採臭兵器です。見た目とは裏腹に、野郎どもと対等にタメを張る研究室唯一の女性M2のHKさん。彼女こそ砂漠に生える一本の花のような存在ですが、ウカツに触れるとトゲに殺されてしまいます。体格がよくてサッカーが好きなM1のYI君は、実験しながらいつも奇声

をあげています。彼の家は学校から近いため、みんなの宿泊先になることが多いです。M1のMIさん。怪しい株に手を出しちゃった。……毎日株価を報告するのが辛いです……口癖は、「飯どうします?」。顔よし、性格よし、頭良しの三拍子そろったB4のKSさんはみんなのヒーロー、最高です。さわやかでクールなB4のTT君は出遅れ癖が多く、平社員から突然会長まで昇格を果たした。次期ポストは一体何になるのでしょうか? B4のKY君は、いまや絶滅が危惧される“朝10時に研究室にくる人”です。馬券の予想に見せる鋭い分析力を研究に活かせるのはいつの日か。コンピューターに詳しいB4のSAさんは正体不明の人物です。このように新田研究室は強烈な個性の持ち主がそろっており、毎日楽しく研究に励んでいます。

古川研究室

古川研究室は設立4年目の比較的新しい研究室で、学生は修士と学部生のみにより構成されています。M2とM1が6人づつ、B4が4人の計16名の大所帯ですが、年齢の近い学生が多いためか非常に仲がよく、楽しい研究室生活を送っています。

古川研はDrや助手がいがないため、学生は先生の直接指導の下で研究を進めています。各学生がそれぞれ一つのテーマをもっており、毎実験ごとに先生とディスカッションを行い次の実験の方針を決める、というスタンスで研究を進めています。先生と一対一で行うディスカッションでは、化学の知識にとどまらず、論理的思考力や計画性のある行動力を養うことができます。学生の就職先は化学の枠にとらわれず、研究室生活で培われた様々な資質を発揮できるような自分の道を考える人が多く、多岐にわたっています。

古川研究室の研究は、分光法（紫外から赤外領域の吸収スペクトル、発光スペクトル、ラマン散乱スペクトルなど）と量子化学計算を用いて、原子・分子レベルで、共役系（ポリアセチレン、ポリチオフェン、ポリパラフェニレンビニレンなどの共役高分子やオリゴマーなど）の

物理化学現象を解明することを目的としています。現在は、大きく分けて以下の4つのテーマについて研究を行っています。

- 1 電気伝導性と構造：共役高分子はドーピングにより金属的な電気伝導性を示すようになります。赤外およびラマン分光法により、金属的伝導の起源となる分子構造について研究しています。
- 2 励起状態ダイナミクス：共役高分子の励起電子状態を吸収、発光、電場変調分光法により研究しています。また、ダイナミック赤外吸収分光測定法を開発し、光照射により生成する励起子とキャリアーの動的挙動を研究しています。
- 3 エレクトロルミネッセンス：有機材料を用いて製作した発光ダイオードの電場誘起近赤外・赤外吸収を *in situ* 測定し、電場により注入されたキャリアーの生成・再結合過程、励起子の生成・消滅過程について研究し、エレクトロルミネッセンスの機構を解明しています。
- 4 電界効果トランジスタ：共役高分子を用いたトランジスタは電界効果ドーピングを利用することで、トランジスタ機能を実現します。このトランジスタの動作機構を、赤外吸収分光法を用いて研究しています。またトランジスタでは極低温で超伝導が確認されており、抵抗値の温度依存性および臨界温度の観測を目指しています。

松本研究室

Ptグループでは、学生5人、ポスドク1人の計6人で研究を行なっています。Pt錯体を用いたオレフィン/アルケン触媒反応や新規化合物の合成を行い、NMR・X線結晶構造解析、MASSやIRなどの分析的手法を用いて研究する人と、Pt錯体とDNAの相互作用を研究する人に別れて実験しています。X線が取れても解析がうまくゆかず、何ができていないのか分からない、予め予想した通りに反応が進行せずにPtが分解してしまう、収率がなかなか向上しないなど行き詰まることもあります。成功

した時の喜びは大きく各人が目的を持って実験を行なっています。

Ru グループでは、現在学生 5 人で日々研究を行なっています。不安定な錯体を扱っているため、真空と不活性ガスのラインでシュレンクやシリンジを駆使し、歯がゆい思いをしながらグローブボックス内で作業したりして、実験を行なっています。主な研究は、構造が似ているため、“カニ”と呼ばれている、ジスルフィド架橋ルテニウムニ核錯体を用いて、いろいろな基質と反応させて C-S 結合を生成することです。他に、S の代わりに Se が入った錯体を扱った研究などもしています。究極の目標は、触媒をつくることです。

Eu グループは現在ポスドク 7 名、学生 8 名の計 15 名の大所帯で日々、研究に没頭しています。ここでは、生体分子の超高感度検出のための新規希土類蛍光錯体の合成とそれを用いたイムノアッセイ、DNA ハイブリダイゼーションアッセイ、インターカレーター、キャピラリー電気泳動、顕微鏡など、最先端のプロジェクト研究から学生の卒業研究まで幅広く行なっております。アッセイ組は、いろんなプロジェクトでてんでこ舞いになりながら分析、合成組も有機研に負けない環境のもと合成尽くしの生活で研究に励んでいます。

博士号を取得して

秋田 征人

正直なところを言ってしまうと、博士課程に進んだのは新規の装置を立ち上げるのが目的でした。

修士までは超高真空の装置を用いた実験をしていたのですが、かといって LEED や AES などの超高真空では標準装備のような装置は無く、いざ就職するにしても自分の武器は一体なんなのだろうと考え込んだわけです。そんな折に本格的な装備をいじれるということで……最終的

には、真空関連の知識や技術はせいぜい人並みに終わってしまいましたが。

今は、博士課程での研究とは違う内容で研究開発を楽しみ又苦しんでおりますが、博士課程での貧乏ながらに装置を保守管理しつつ研究を進めていく作業は、企業で重要とされる能力を身に付ける良い機会であったと感慨も深い今日この頃です。内定早々には、果たして感覚が追いついていくかと心配になっていたのですが、実際に職場に入ってみると、意外に無駄や創造力の欠如というものがまかり通っている部分もあり、企業に就職するにしても博士課程での経験は無駄ではなかったようです。

いずれにしても、私一人の力で学位を取得できたわけではなく、色々な方々からの激励、批判、肯定、否定、同意、反発、賞賛、中傷、正負それぞれの刺激と影響があつてこそ、精神的に淀まず前に進むことが出来たのだと確信しております。この場をお借りして、直接、間接を問わず、私に影響を与えて頂いた多くの方々に感謝とお礼を述べさせていただきます。有難うございました。

浦井 芳枝

稲化会報で幾度か拝見する機会があったこのタイトルの文章を、自分が書くことになるとは思っていなかった私ですが、御陰様で何とか 20 世紀中に学位を取得することができました。その過程で多くの方々に大変御世話になりましたので、この場をお借りして御礼申し上げます。主査の伊藤紘一先生、副査の高橋博彰先生、古川行夫先生、中井浩巳先生、共同研究者の齊藤淳史氏、白井英治氏、大江親臣氏、OB の長谷川健氏、津田信博氏、1 年先輩の長坂律子氏、同期の松並（旧姓：野口）由木氏をはじめ、化学科の先生方、OB の皆様、当時の在学生の方々に、色々と御指導、御助言、御協力頂きました。また、化学科連絡事務室にいらした岡根由美子氏や、化学系実験室、物性計測センター、環境保全センターなど学内各所の方々の御尽力により、研究生活を円滑に送ることができました。皆様、本当にありがとうございました。

学生として研究室で過ごした期間には、大小様々な出来事がありました。当時のニュースの中で化学にも多少関係するようなことを思い出してみると、もちろん明るい話題もありましたが、長野県松本市と都内の地下鉄で起きたサリン事件、和歌山ヒ素カレー事件とそれに続いて多発した飲食物への毒物混入事件、茨城県東海村の原子力発電所での事故など、多くの人命が奪われた胸の痛むような事件や事故も強く印象に残っています。自分自身に関する出来事としましては、元気なことだけが取り柄のはずが、円形脱毛症や肺炎などにかかってしまい、周囲の皆様にご迷惑や御心配をおかけしたことがありました。また、長い間在学していたためか、当時構内にいらした何人かの方々(清掃スタッフの女性、受付の男性、生協のレジや食堂の女性)も私の顔を覚えてくださったようで、お会いする度に声をかけて頂き、とても励みになったことも思い出されます。

もっと気の利いたことや皆様のお役に立つようなことが書けると良かったのですが、結局まとまらない文章になってしまいました。最後になりましたが、化学科の御発展と、先生方や卒業生・在学生の皆様のご多幸を、心よりお祈り申し上げます。

大江 親臣

本当にいろいろなことがありましたが、何とか博士号を取得することが出来ました。この場を借りまして、審査をしていただいた、伊藤紘一先生、高橋博彰先生、古川行夫先生、中井浩巳先生に感謝いたします。

私はB4～D1までは井口馨先生、D2は伊藤礼吉先生、D3からは伊藤紘一先生の所で研究してまいりました。やはり、博士号を取得するまでの大きな出来事は、伊藤礼吉先生とそれに続く井口馨先生の突然のご逝去です。伊藤礼吉先生は私が礼吉研で研究を行う頃にはすでに入院生活を送っておられたので、ほとんどお話をする機会がありませんでした。OBの方々から伝え聞く話のみで、それが今でも残念でなりません。しかしながら、井口先生とは学部の際に

入った研究室であり、そのときに何度か言われた言葉があります。「あせるな。あせて半可なものを身に付けるより、ゆっくりやっちゃんとしたものを身に付ける方がずっといいだろう」という言葉です。そのときはその言葉を余り気にはしていませんでした。その後、D3の時までは井口研や礼吉研のOBの方々と共に共同研究を行いながら、理論計算を行ってきました。そして、助手にさせていただいた時から実験をやり始め、伊藤紘一先生に最初からご指導していただきました。こうして何とか実験に慣れ始め、理解も進んだ頃、母の余命が長くて1年ほどだと知らされました。自分では学位を取得するには結果が足りないよう思われたのですが、博士号を取得する決心をして、伊藤紘一先生や学生たちの力を借りて何とか博士号を取得することが出来ました。しかしながら、博士号を取得する前に母は死んでしまいました。学位記の日付よりも10日ほど前のことでした。

こうして大切な人ばかり3人も亡くなったわけですが、これらのことから学んだことはこれからのいろいろな形で伝えていく義務があるような気がします。最近上記の井口先生の言葉がよく思い出されます。研究内容は理論計算から振動分光へと大きく変わったように見えますが、研究には共通する姿勢があると思います。自分はその姿勢を貫いているかということに不十分ではありますが、その姿勢を養う形の一つが上記の井口先生の言葉ではないでしょうか。

近藤 祐一

私が博士号を取りたいと初めて思ったのは、遙か昔の小学生の頃である。取りたてて高尚な目的が有った訳ではなく、博士という言葉の響きに魅せられた結果であったと記憶している。幸か不幸か、この気持ちは中学・高校・大学と進学しても変わる事は無かった。私にとって大学とは博士号を取る場所だった。だから、博士号を何とか取得できたのは大変嬉しかった。父母を博士号授与式に招待する事もできた。あまり親孝行をしていなかった(今もしていないが)不祥の息子としては最低限の事は出来たと

思う。

しかし、博士号取得までの道のりは平坦ではなく、今になって後悔していることが山ほど有る。学位取得に5年も要してしまったこと、3年も実験しながら論文にならなかった研究が有ること、測定が困難なため諦めた研究が有ること、頭の中で描くだけで実際に行えなかった研究が有ること、等々。一言で言えば計画性が無き過ぎた。博士論文自体も執筆に3ヶ月ほどしか割いておらず、今見ると全面改定したくなるような出来である。後悔先に立たず、とはよく言ったものである。

もう一つ、自分でも信じられないことだが、実は私は博士号を取った後のことを当時全く考えていなかった。冗談の様な話だが、本当である。在学中にまともな就職活動は殆どしなかったし、他大の研究者と交流を持つことも無かった。これは大失敗だった。もっとも、こんな間抜けな私に救いの手を差し伸べてくれる会社もあった。研究・開発関連のベンチャー企業であり、私が現在勤務している会社である。設立されたのは私が博士課程2年生の頃。ラッキーだった、のだろう。

なんだか悪い点ばかり話してしまったが、博士号を取得する事によって得られたものもあった。最も大切なのは研究内容に関し論理的な思考を行えるようになった事と、分析手法や分析装置に対する知識と理解力が大幅に増えた事である。今、私は在学中はまったく行わなかった金属表面の元素分析を行っているが、博士課程での経験が無かったらこの業務は勤まらないだろうと思う。あの5年間は無駄では無かった。心の底からそう思う。いや、無駄だったら石原先生に顔向け出来ませんが。

と、言うわけで、博士号を取得するのは楽では無いですが、得られるものも決して小さくはありません。これを読んでいる君、試しに進学してみませんか？

納谷 真一

私は、新田信教授のご指導のもと21世紀最初の春に博士(理学)を取得しました。博士論文の

研究課題は「ヘテロアズレンで安定化されたカチオン類の合成と性質」といういってみれば酸塩基で色が変わるものの研究です。思えば小学6年の自由研究が「リトマス試験紙に代わるもの」であったというのは不思議な運命のめぐり合わせであると思えます。その頃からNHK特集などの科学番組でみて目標としていた“納谷博士”にようやくなれたかと思うと感慨深いものがあります。

この場では、かつこの中に追いやられてしまった“理学”ということについて、私が常日頃考えていることを述べさせていただきます。

3年生の研究室訪問にて「それって何の役に立つんですか？」などという質問を受けると驚かされます。ここは化学科であって応用ではなく、理学であって工学ではないはず。“役に立つ”のは結果であって、目標ではないと考えます。そして、理学の研究の本質は、知的好奇心に裏付けられた未知への探求であると考えます。幸か不幸か私の研究は、色素という応用が考えられる“役に立つ”かもしれないものを取り扱うものですが、だから研究したのではないということ強調しておきたい。私が28年間やってきたのは“サイエンティスト”であって、“エンジニア”ではない。また、ゴッホのひまわり、ベトーベンの第9は直接にかの役に立つから価値があるのではないと考えます。同様に、あくなき未知への探求は、人の文化そのものであると思う。そして、そんな文化を大切にすることこそ、真の意味での豊かさをもたらすものであると考えます。さらに、応用という話が出てくるときに、よく私は次のような例をあげることにしています。それは、「アインシュタインが一般相対論を創造したとき、リーマン幾何学はすでに存在した」ということです。リーマンは、まさか自分の幾何学が重力によりねじれた時空を表現するとは思ってもよらなかったはず。純粋に非ユークリッド幾何学を追求した結果、テンソル解析により導かれるリーマン幾何学にたどり着いたといえます。今、人類が持つつたない知識で、将来応用できるかどうかなど判断出来ないのと同時に、いま応用が考えられるものだけを追求するのは、研究の多様性を阻むも

のになると感じます。

今年の夏10作目を迎えた人気RPGの、第1作目オープニングのメッセージは「そして探求の旅は始まった」です。前人未踏の地(スタートレックからの引用)を目指し、真実(インディーズからの引用)を求める探求の旅をこれからも続けていきたい。その道のりにおいて可能なら「ノーベル賞受賞」という形で、12年間もお世話になった早稲田に対し恩返しが出来たらと思う。

山本 浩之

わたくしが学位を取得できたのはひとえに新田先生の御尽力の賜物であり、まことに感謝しております。といいますのも、わたくし自身、自らが博士の学位に相当する能力を有しているのか否かがいまだ不明であり、学位取得に対し恐縮するばかりであるからであります。早稲田大学理工学部化学科に入学しはや12年、研究生生活も9年の歳月が過ぎましたが、真髓に触れるどころかその気配だけでも感じられた時が今までにあったであろうか?と思い悩む日々を過ごしております。博士課程進学当時の課題であった「化学の研究を通して自然を見つめ、その真髓を見極めること」、このことを成し遂げる難しさだけはどうか見えてきたように思えますが、当の「真髓」はいずこにあるのかの見当すらつけられぬ自分がまことに腑甲斐無く感じております。今後の検討課題となることを余儀無くしてしまったわけですが、博士学位を取得してしまった以上、順序が逆には成ってしまいましたが、この課題を完遂する責任があり、その日が訪れることを切に願うばかりであります。

稲化会会計報告

99年度		
前年度繰越		¥ 1,463,018
〈収入の部〉		
会費 (99)	¥	782,750
寄付 (G 94)	¥	34,829
利息	¥	90
合 計		¥ 2,280,687

〈支出の部〉		
理工学会年会費	¥	3,000
振込入金手数料 (郵便局)	¥	9,440
文房具他 (名簿送信用)	¥	18,235
印刷費 (名簿10版 1,100部)	¥	167,475
印刷費 (会報15号 1,100部)	¥	113,190
返信葉書 (10,000枚)	¥	42,000
封筒 (角2,400枚)	¥	54,600
送料 (652通)	¥	136,920
アルバイト代 (¥2000,12)	¥	26,000
昼食費	¥	22,554
前年度残高相違	¥	1,000

次年度繰越金	¥	1,686,273
合 計		¥ 2,280,687

00年度		
前年度繰越	¥	1,686,273
〈収入の部〉		
会費 (00)	¥	150,750
	¥	94
合 計		¥ 1,837,117

〈支出の部〉		
理工学会年会費	¥	3,000
振込入金手数料 (郵便局)	¥	2,940

次年度繰越金	¥	1,831,177
合 計		¥ 1,837,117

お 願 い

○稲化会へのご意見や卒業生の方々のなさっている研究の内容等、自由な投稿をお願いします。

〒169-8555 新宿区大久保3-4-1

早稲田大学理工学部連絡事務所係気付稲化会

○稲化会費を納入してください。正会員1,500円、学生会員750円。なお終身会員費は30,000円です。最近滞納する方が増えておりますので、お支払いをお願い致します。

○住所を変更された方、また最近住所を変更した卒業生を知っていらっしゃる方、お手数ですが稲化会へその旨の連絡をお願い致します。

○同封にてお送りしました名簿のチェックには万全を期したつもりですが、変更・間違い等がございましたら、ご連絡下さい。宛先は、

〒169-8555 新宿区大久保3-4-1

早大理工 化学科 連絡事務室気付稲化会

稲 化 会 役 員

会 長	長瀬 裕		
副会長	古川行夫		
監 事	高橋博彰		
評議員	伊藤紘一	高橋博彰	高宮信夫
	多田 愈	中井浩巳	中田雅久
	新田 信	松本和子	石原浩二
	長瀬 裕	矢野圭一	中山 匡
	小又昭彦	井上国見	宮田信郎
	百瀬 浩	小林憲司	宮野浩行
	伊藤信一	塚田光男	境之佳樹
	小西隆太郎	朝倉徹也	泉千英子
	神崎昌之	五十嵐庸	國松美由紀
	上杉有紀	森川 毅	野口由木
編集理事	伊藤紘一		
会計理事	石原浩二		
庶務理事	松本和子		
学生理事			
M 2	市川尚志	伊藤邦孝	塩野大寿
	中田安紀		
M 1	佐々木沙織	森脇 誠	依田杏介

B 3 大嶋陽介 笠原崇廣 小林正人
桜田奈央子 中野 永 山谷舞子

〈編集後記〉

白川先生に続いて本年度は野依先生がノーベル化学賞を受賞され、化学界は大いに元気付けられました。反面、イスラム世界と西欧世界との間の殺し合いという痛ましい出来事も続くうちに、2001年が終わろうとしています。この2年間、化学科に大きな異動はなく、各先生は研究・教育に邁進しておられます。化学科は1973年4月に創設されましたが、本年度は稲化会の会員数がはじめて1000名を超える記念すべき年となりました。2003年5月には30周年を祝うべく高宮名誉教授・長瀬稲化会会長を中心に行事計画案が練られつつあります。企画その他についてご意見・ご提案がありましたら高宮先生にお伝え下さい。また、本会報の「卒業生便り」欄を会員間の意見交換の場として役立てたいと考えております。内容は問いませんから、1800～900字程度に原稿をまとめて、伊藤 (e-mail: itohk@mn.waseda.ac.jp, fax: 03-5273-2606) までお送りください。

追記：会報の印刷を翌日に控えた12月13日付の読売新聞朝刊は、卒業生便りで“中学現場から理科を思う”を投稿して下さった益田孝彦君の指導した三崎中科学班の共同研究「城ヶ島の地層に迫る」が、第45回日本学生科学賞の内閣総理大臣賞を受賞したことを報じました。受賞を祝し、同君のますますのご活躍を期待します。

(2001年12月、伊藤記)